

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 546 号 ] 2007 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.546  
December 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

第 101 回定期演奏会・創立 45 周年記念公演 [ ]

## 新たな 100 回の始まり

去る 11 月 17 日、第 101 回定期演奏会は「バッハのクリスマス音楽」の標題のもと、モテット 2 曲とカンタータ 1 曲のプログラムで開催されました。

モテット第 3 番《イエス よろこび》

カンタータ第 65 番《もろびと シバより来たり》

モテット第 1 番《歌え 主に向かいて 新たな歌》

恒例のクリスマス・コンサートとしては時季がやや早かったり、なじみのうすい会場（中央会館ホール）だったり、聴衆の入りか懸念されましたが、当日はほぼ満員のお客さまをお迎えすることができ、また演奏も上々のので、創立 45 周年記念公演 [ ] も、春の《マイ受難曲》記念公演 [ ] とともに、大成功裡に終了いたしました。ご来場いただいた皆さま、温かい応援をお寄せくださる皆さまに、あつく御礼を申し上げ、ご報告いたします。

新年（2008 年）以降の第 102 回定期からは、またカンタータ中心のプログラムにもどって、既演・未演の作品をとりまぜ、まだまだ奥深く私たちを待っているバッハの音楽の森に、探訪をつづけてゆく予定です。2009 年のドイツ巡演後は、《マイ受難曲》のほかにも、《ヨハネ受難曲》《口短調ミサ曲》等、かすかすの大曲を、あまり間隔をおかずに取り入れようとの希望もあり、年 2 回公演ではなかなか収まりきれないほどの曲数を、早めに調整して、長期計画を確立させようと、検討中です。



創立 45 周年記念 第 101 回定期演奏会, 2007 年 11 月 17 日, 中央会館ホール  
写真は、カンタータ第 65 番（第 2 ステージ 1 曲目）  
独唱：T 鳥海 寮（左）、B 佐々木直樹（右）、合奏：東京カンタータ室内管弦楽団、  
オルガン：草間美也子、指揮：大村恵美子

（写真提供：松尾茂春）

第 101 回定期演奏会 会場アンケートより  
演奏会全般について

「とても素晴らしい演奏でした。来てよかったと思いました」

「落ち着いていて良かった」

「モテットは久しぶりに聴き、くり返されるコーラルが心にしみました」

「モテット 3 番は重みがあり、後半の 2 曲は躍動的で明るく、休憩前と後の音楽のコントラストがとても良く出ていて、すばらしかった」

「カンタータは明るく歓びにあふれてよかった」

「大村氏の指揮による演奏は、表現に強弱があり、たいへんよい出来ばえと思いました」

「まとまって調和のとれた発表でした」

合唱・ソリスト・管弦楽等について

「いろいろな方がいる素人の合唱とは思えないハーモニーでした。ソリスト、それぞれに聞かせどころがあって、うっとりした」

「みなさん、手を抜くことなく、一生懸命歌っていらして、気持ちよさそうでした。すばらしかった」

後援会員・サポーターの皆さま

### 東京バッハ合唱団 クリスマス会

年末恒例の、納会を兼ねたクリスマス会です。  
ご家族やお友達を誘って楽しくすごしましょう。

**バザー**同時開催（献品大募集！）

・日時：12 月 17 日（月）18:30 - 20:30

・会場：目白聖公会

・会費：1000 円（軽食ご用意します）

参加のお申込み・問合せは、事務局まで。



年内の練習は、12 月 15 日（土）が最終です。

2008 年の練習開始は、

・1 月 12 日（土）15:30 - 17:30、世田谷中央教会

（新年会 12:30 - 、千歳船橋、ピストロ・オランダヴェー）

・1 月 14 日（月）18:30 - 20:30、目白聖公会

練習曲目：BWV67, 102, 169, 182, (8, 131)



たです」

「合唱は日本語の発音が明晰でない」

「ハーモニーが耳に心地よかった」

「ソリストが合唱に加わって最終曲を歌ったのはよかった。こどもたちは可愛かった」

《マタイ受難曲》で児童合唱を歌った中から3人の小学生が正規の団員として入団しました。

「ソリストご二人、たいへん印象的でした」

「オーケストラのバランスがとても良かった」

「ホルンとオーボエの音の伸びがエンジョイできました。

アンコールの歌曲のときのチェロもお見事で、とても気に入りました」

#### 日本語演奏について

「このような試みがきちんとした形でなされていたことを知って、感動しています。曲と歌詞が自然な形で違和感なく訳されておりすばらしく、御苦労に対し多謝！」

「親しみやすく良いと思います」

「日本語で聴くということができて、とてもうれしかった。ふだん以上に楽しめました」

「バッハを日本語でできるとは思ってもいませんでしたが、とてもよい試みと思います。このようなコンサートを100回もつづけていらっしゃるということに感動いたしました。今後も長くつづけていらしてください」

「曲の内容がわかるのでたいへん良い」

「言葉がわかり内容がすばらしい」

「日本語のバッハをはじめ聴いたが、音楽として異質なものを全く感じなかった。とても新鮮だった」

「日本人は、(欧米人に比べ)声帯や横隔膜や肺活量などの体力に欠けるところを、まじめさ、真摯な想い、執拗な情感も加味しながら、なにごとくも吸収・表現してゆく力やパッションを持っているのかもしれない。日本語演奏を、すばらしい試みと感じました」

#### その他

「言葉を読みながら聞かないと分からないので、客席に光をもう少し欲しい」

#### おたより

小島 陽子(後援会員)

第101回定期演奏会を聴かせていただき、ありがとうございました。とてもやわらかいハーモニーで、バッハの気持ちが伝わってくるようでした。全身から溢れるような指揮はこころが揺さぶられるように感じられました。

10年前、私がお仲間入りしていたころ赤ちゃんだった、室田さんのお子さんがみごとに成長され、堂々と歌っていらっしゃる姿に感動いたしました。みなさん家族のように気持ちを一つにしての演奏は、音楽をいっそう厚く、深くしているように感じました。

月報 11月号に宮田光雄先生のお話が出て、感激もひ

としおでした。亡夫[故・小島良平氏]とはフンボルトで同期で、ずっと尊敬申し上げておりました。主人が亡くなったおり、私宛てに『いのちの証人たち』をご恵贈いただきました。先生の御著書は、主人存命中にもずいぶんたくさん頂戴しましたが、その後、岩波から出版された全集を、私も求めまして読んでおります。

いつも月報をお届けいただき、共鳴しながらたのしみに拝見しております。お寒くなりますので、くれぐれも御自愛のほどお祈り申し上げます。

児童合唱からの入団：室田悠介(小6) 石田敦子(小4) 室田真由(小1)。3人とも、両親・母親が団員で、そろって練習に通っています。

#### 東京バッハ合唱団 創立45周年記念

#### 「マタイ受難曲」演奏会 記念文集

#### <補遺>

3月21日に《マタイ》を終えると、すぐ翌日から、公演参加者の皆さまのメッセージが寄せられました。原稿授受の方法・手段は多岐にわたりましたので、後書きに「本当に提出された原稿のすべてが収められたか、今も気になるところです」と認めつつ、記念文集は7月1日の創立記念日に上梓され、140名の筆者の熱い思いが記録されました。

その後、お二方より原稿の掲載漏れのご指摘をいただき、調査しましたところ、e-mail フィルタリング機能の誤作動に伴う見落としであったことが発覚いたしました。ここにお二方および関係者の方々にお詫び申し上げるとともに、「補遺」のかたちをもって、読者のみなさまのお手許にお届けいたします。

2007年12月1日

記念文集編集委員会

1.141

飯島 美菜子(ヴァイオリン)

第100回マタイ受難曲演奏会、ご成功おめでとうございます！

日本語訳詞のマタイは、初めてで、母国語で聴くことが出来るというのは、私にとって、貴重な経験をすることが出来ました。ありがとうございました。

1.142

マタイ受難曲演奏会に参加して

岡田 英彦(松山団員)

バッハのマタイ受難曲を、日本語で歌う機会を与えられたことに、とても感謝しております。大村先生の、全てを包み込むような音楽に身をおいて自分の母語で歌う中で、イエスの受難を描き出すバッハの音楽をいっそう生々しく実感できました。また小さな子供たちの歌う、特に29番のコラールにとっても感動して胸が詰まりました。この演奏会には東京地区にいる親戚・兄弟、友人たちなど10人が聴きにきてくれました。生涯忘れられない思い出となることでしょう。6月にフライブルクバッハ合唱団と同じ曲を歌うのですが、それは、今回とは別な世界であるような気がしています。東京バッハ合唱団のみなさま、ありがとうございました。

# オーストラリアのバッハ合唱団員からご挨拶

クインズランド・バッハ協会合唱団  
The Bach Society of Queensland

東京バッハ合唱団

主宰者 大村恵美子様

拝啓

初冬に入った日本、ますますご健勝のことと存じます。初夏の豪州ブリスベンから初めてのお便りを差し上げますクインズランド・バッハ協会合唱団の藤田正範です。

かねて海外のバッハ合唱団の活動、交流に関心を持ち、先般4月に帰国の折、福岡から電話で照会しましたところ、ご丁寧なさっそく、第100回定期演奏会の「マタイ受難曲」(日本語演奏)プロ等貴重な資料をお送りいただき、ありがとうございました。

さっそく私どもの機関紙に紹介を図ったのですが、発行が送れ、ご挨拶も遅れてしまいまして申し訳ありませんでした。

当地バッハ合唱団は、数十名の混声合唱団で、私たち夫婦(家内は在留邦人合唱団も別途主宰)とアルトの方、合わせて3人の日本人がハモっています。

50人ほどでカンタータ等のバッハ作品を中心に、さらに設立(1971年)以来毎年恒例の「メサイア」を、聖堂で演奏しています。

残念ながらいまだ「マタイ」は演奏していません。日本語演奏等、貴重な活動を重ねられ、敬服いたします。日本のバッハ合唱団が「マタイ」の演奏にこれほど真摯に取り組んで来られたことを、当団諸氏は驚異に受け取り、かつ賞賛しています。

どうか主宰者としてのご意見をお聞かせ頂きますよう、よろしく願いいたします。

なお、最近の当団コンサートの案内と貴団紹介の弊機関紙を添えますので、ご覧ください。

私たちもこれを契機に、貴団との友好交流の途を開いていきたい、ご同意賜れば幸甚です。

敬具

藤田 正範



左: 10月14日, ハイドン「レクイエム」とバッハ「カンタータ第2番」  
右: 11月24日, ヘンデル「メサイア」, いずれも Neil Mason 指揮。



クインズランド・バッハ協会ニューズレター「Bach in Five Minutes」(www.bachsocqld.org.au)2007年7月号より

## カンタータを日本語で歌う 東京バッハ合唱団

バッハ協会や合唱団は、世界中いたるところに広がっている。インターネットのグーグルで Bach Societies / Choirs を検索すれば、たちどころに、ロンドン、ベツレヘム、フェニックス、ヴァンクーヴァー、ピッツバーグ、サンフランシスコ、ヒューストン、カリフォルニア、香港、バーミンガムが示される。初めのたった1ページだけで。われわれ団員にとって、よその国のバッハ合唱団の活動を知ること、とても興味深いにちがいない。そこでこれから随時、世界中のバッハ合唱団を取り上げることにしよう。この号では、東京バッハ合唱団にスポットを当ててみる。

われわれの日本人メンバー、ユリとキョウコと正範の好奇心(と探索作業)のおかげで、東京は世田谷に、大村恵美子氏[記事中では、最後まで Kimura となっていた]が主宰しているバッハ合唱団があることがわかった。東京バッハ合唱団は、先ず最初に、日本の新聞の記事の中で、わが団員ドクター・ユリ・フルノの目に留まった。その記事で、大村氏はバッハの音楽を一緒に歌いましょうと呼びかけていた。この合唱団は1962年に設立され、今年3月、創立45周年と第100回の定期公演を記念して、「マタイ受難曲」を上演した。この合唱団の特筆すべき点は、大村氏が50曲以上のバッハ作品を日本語に訳していることにある。そのおかげで、この合唱団では、バッハの音楽を自分たち自身のことばで歌うことができる。「マタイ受難曲」は、この合唱団によって1982年に日本語での最初の演奏がなされたが、団員たちは、歌詞の意味するところを十分に理解しているので、より深い感情をこめて歌うことができると、大村氏の努力への賞賛を惜しまない。東京での公演につづいて、彼らは松山に旅行して、松山バッハ合唱団とともに、同作品を、こんどはドイツ語で演奏した。次回のコンサートでは、バッハのモテット第3番、カンタータ第65番、モテット第1番を演奏する予定である。

もう一人のメンバー、藤田氏は最近、日本を訪問し、当合唱団のニューズレターの4月号を持ち帰った。この紙

上で、大村氏は「3月21日の第100回定期《マタイ受難曲》日本語演奏は大成功だった。日本の聴衆は、25年前の初演時に比べ、より理解が深まっていたようで、演奏後、多くの方々からわれわれの努力に対する讃辞をいただいた」と述べていた。同紙によれば、この日の公演には児童合唱団も加わっていたとのこと。

藤田氏は、この合唱団の演奏したバッハ・カンタータのCDと同合唱団の出版した楽譜のリストを持ち帰っている。クインズランド・バッハ協会のメンバーで、これらの資料を見たい方は、ユリ、キョウコ、正範にたずねていただきたい。日本語の新聞記事翻訳と合唱団についての記事執筆では、ドクター・ユリ・フルノのお世話になった。感謝を申し上げる。

## 新企画 「バッハ・コラールハンドブック」

教会カンタータ BWV1～199の全コラール訳詞・旋律つき」

大村 恵美子

「こんなものがあつたらなあ」と長年、心にあたっていたアイデアが、形をとって結晶しました。

教会カンタータ全曲の訳出を完成した結果、ずいぶん多くのことが見通せるようになったのですが、その中で、私が特にほしかったのは、それぞれのカンタータのメッセージの核心を語りかけてくれる「コラール」を、いつでも取り出してみられるような、コンパクトなハンドブックでした。いわば、バッハが用いたコラールのみによる、讃美歌集とでもいえますか？ 無数のコラールの中から、バッハがカンタータごとに綿密によりわけた、栄えある128曲のコラールとそのカンタータとの関連を、一目で分かるように整理しなおしたものです。

楽譜は、全体を最小限にとどめるため、1本のコラール旋律のみを提示することにします（ドイツの教会で用いられているコラール集と同じ）。そこから変奏曲となって多様に紡ぎだされる、その源を、1本の主旋律で代表するのです。

これを携えることによって、これまでに聴き、歌い、文献で調べてきたバッハのカンタータが、バッハの作品の全体像の中から、はっきりと浮かび上がってきて、未知のもの、既知のものをわきまえつつ、自分の中できちんと納まってきます。（どれだけ歌いおぼえたかという蒐集の楽しみも。）

さらに深まれば、バッハの作曲した心の内を、いろいろな面から共感することもできましょう。こういうテーマをとりわけ愛したのだ、こういう面とこういう面をとり合わせて、1曲の作品にまとめたのだ、etc. 興味は果てしないのです。ただ個々のカンタータに接して、遠心的に印象を与えられてきた段階から、ぐっとバッハの創作に近づくこととなります。

いまは、このハンドブックの効能を、的確にお伝えするのはむずかしいのですが、来年中には出版の運びとなるよう、努力をつづけていますので、実際に手にとってごらんいただける日を、どうぞご期待ください。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ50曲選!! <その10>

## カンタータ第61番《いざ来たりませ 世の救い主》

有楽町の国際フォーラムから丸の内界隈を丸ビルにかけて歩いてみた。クリスマスシーズンの上品な光の装飾に、美しいなぁと単純に魅せられてしまった。この空間をみごとに演出する技量は至芸といっている。

イルミネーションの光は、聖書のクリスマスのできごとと実にイイ線で近づいている。なぜなら、伝統的にイエスの降誕は、闇夜を照らす光として理解されているからである。この曲のテノールのレチタティーヴォの歌詞においても、そのモチーフが穏やかに歌われている。

照らしたもう 恵みのみ光を（第2曲、テノール・レチタティーヴォ）。

しかしイエスの降誕の光は、人知れぬ土地、だれも予想しなかった場所に輝いた。足ばやに人が行きかう、現代のせわしない丸の内界隈のイメージではない。どこかもの寂しい暗がりからイエスの降誕の光はひろがっていく。降誕の光は、だれも照明をあてることのない、人の悲しみや不条理にそっと寄りそうような光なのだろう。

それを象徴するように、第1曲目の序曲(合唱)は静かな導入ではじまる。そこがこの曲の魅力の一つである。人知れずそろりと神の物語が始まっていく、そんな感じがする いざ来たりませ 世の救い主 / きよき 神の子 / 不思議のみわざ / 神は なしたもう (M.ルター詞)

神の御業はなんと不思議なのだろう。だって、キリストならもっときらびやかに、たとえばサンタさんのように空をトナカイと飛んで、劇的に、煙突からずどんと落ちるように現れたっていいじゃないか。でも、人の想像をこえて、イエスは われらの血と肉を おのが身にとりて 人となり て(第2曲)、世に来てくださった。その 救い主 イエスが私たちの心の扉をたたいているというのである(第4曲、バス・レチタティーヴォ)。

それに応答するように、清らかな歌声で 開けわが心 イエス入りたもう (第5曲、ソプラノ・アリア)とつづく。そして最後はニコライのコラールで アーメン アーメン まませ喜びのわが君 主こそわが望み (第6曲)と簡潔に、高らかに結ぶ。

内容ゆたかな構成に、イエスの降誕の意味を深いところで確認できるカンタータではないだろうか。曲全体をとおした落ち着いた雰囲気は、降誕をてばなしで喜べない、十字架のできごととも射程にいれているのだろうか。このクリスマスに、くりかえし聞きたい味わい深いカンタータである。(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

CDバッハ・カンタータ50曲選[第8巻]に収録。

S 光野孝子, T 平良栄一, B 水野賢司, オルガン 草間美也子, 指揮/訳詞 大村恵美子, 東京カンタータ室内管弦楽団, 東京バッハ合唱団. 2002年録音(第92回定演)

使用楽譜: BREITKOPF/東京バッハ合唱団「50曲選」No.19